

Title	アメリカ社会の形成と「媒介機構」
Author(s)	柴田, 史子
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.17, 2000.3 : 362-378
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3455
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

アメリカ社会の形成と「媒介機構」

柴田史子

序

社会が専門分化し、福祉国家が個人の生活の細部まで統制するようになった今日、個人の側からの積極的な社会参加はどのようにとりつけられるであろうか。

個人は、様々な交わりに関わるることによって全体社会に統合されている。その交わりのなかには、近所付き合いのような非公式の緩やかな集まりもあれば、政党や組合のような明確な目的を掲げた組織であることもある。それらは、自然発生的なものであることもあれば、意図的に形成され自発的に参加するものであることもあり、顔見知りのみから成る比較的小さな交わりであることもあれば、直接的な関わりの少ない交わりであることもある。また、全人格的なコミットメントを期待するものであることもあれば、特定の目的を追求するためだけに関わるものであることもある。このような人と人の交わりのあり方に注目することによって、それぞれの社会において個人がどのように社会との関係を築いているかを探ることが出来る。

そこで、ここでは、アメリカ社会における人と人の交わりのあり方の特質を、その社会の成り立ちとの関連の中で捉

え、エスニシティ、エスニック集団が果たしている役割とその可能性を概観したい。

一 用語の問題

個人、または第一次集団と全体社会の間にあつて両者を媒介している集団を「中間集団」と呼び、参加の形態による分類（自発参加か否か）、活動目標による分類（営利目的か否か）、活動領域による分類（政治、経済、宗教など）、機能による分類（手段的、表出的、専門的など）にもとづいて論じられるのが一般的である。

しかし、個人と全体社会の間にあつて、個人に自己表現・自己実現の場を与え、社会における自分の位置を知らせることによつて社会への帰属意識を高め、社会の統合を助ける交わりを「集団」という概念で捉えることは適切であろうか。

ピーター・バーガーとリチャード・ニューハウスは、現代アメリカ社会において個人に力を与え、積極的な社会参加を促す可能性を秘めているものとして、近隣、家族、教会、自発的結社を挙げ、それらを「媒介機構」(mediating structures) という概念で捉えている。

かつてトクヴィルが観察したように、解決するべき問題があるとき、アメリカでは、政府や貴族に期待する代わりに草の根の人々が協力することに当る傾向がある (Vol. 2, p. 114)。しかし、このことは、必ずしも一定期間以上存続する、メンバーとメンバーでない人間の境界線をはっきり持つ集団の形成を意味しない、緩やかな運動以上のものにならない場合もあるのである。

ここでは、社会集団と社会集団の母胎になる「半意識的集合体」(agrégat semi-volontaire) を包括するものとしての

「媒介機構」を議論の対象とする。

二 旧世界における媒介機構の変遷

集団は、複数の人間の間に共通の感情（集合心性）が存在するところで形成されるが、そのような集合心性があらわれる場合は、時代の変遷とともに変化し、多様化する。ここでは、自然発生的に社会が生まれ、時を重ねてきた社会として西ヨーロッパ社会を取り上げ、その歴史の中で、媒介機構の種類がどのように多様化してきたかを概観する。

一般庶民の生活の場となっている社会が小規模で、比較的同質的である時代には、集合心性はその社会自体を基盤とする。つまり、人は何ものにも媒介されずに直接その小さな社会（村落共同体）と向き合い、その社会とのみ関わり、一生その社会の中で生活をする。

一つの社会の中で分業が進むと、同種の者の間に他の者よりも密な関係が生じる。それは、まず、名士たちの集まりの形をとる。八世紀頃には、社交、相互扶助、祭祀、宗教の実践を目的とした中産階級以上の者の家族ぐるみの集まりがあらわれてくる。これは、社会の拡大と共に、次第に同業者の集まり、いわゆる商人ギルドへと分化していく。九世紀頃のイタリアに出現したコレギア（*collegia*）、スコラエ（*scholae*）、フランスのコンフレリ（*confrerie*）などがその例として挙げられる。初期のギルドの中には、支配者がその支配力を補完するものとして作らせた御用ギルドもあるが、次第に、町の有力商人や親方が封建諸侯や貴族に対して、自分達の利益を守るための組織になっていった。^①そして、この組織は、徒弟に職業訓練を施す一方で、商売や技術を独占し、庶民に対して自分達の指導的地位を維持するた

めのものとしても機能した。この機構によつて特に親方達は、徒弟が親方になるのを遅らせるために「職人巡歴制度」を設け、徒弟たちに各地で修業を積むことを課した。²⁾そして、そのように巡歴する徒弟達の情報交換の場としての宿屋、居酒屋が発達することになり、徒弟の間に地域を越えた結束が生まれることになる。たとえば十五世紀頃のフランスに現われたコンパニョナージュ (compagnage) である。ここに、庶民の間に、地縁や職場を共にする縁(職縁)に基づく集まり以外の人間関係が成立したのである。このような結束は、親方階層に対して職人の利益を守るものとして、労働組合的性質を帯びることになる。そして、徒弟階層は、機械化によつて親方階層が独占する技術の重要性が減じる中で、親方に対して一層有利な立場に立つことになっていく。居酒屋を中心とする人の交わりは、家庭と職場が未分化な形態である家内制工場で働く労働者の息抜きの中としての機能も果たすことになる。

一方、上流階級の間では、サロンという媒介機構が十二世紀頃から発達し始める。サロンは宮廷や貴族の邸宅で、多くの場合、貴族夫人が周囲に文人、芸術家などを集める形で開かれていた。ここでは、身分の上下を越えて、金銭の授受もなしに自由な会話と討論が展開された。ブルジョワジーが台頭してくると、彼らは一つ上の階級に入ることを望んで貴族趣味を模倣してサロンへの出入りを許されることを熱望し、それを一種のステータス・シンボルと感じるようになる。フランスにおけるサロンは、宮廷がベルサイユに移ると一時下火となったが、ルイ十四世の没後再び盛んになり、活発な哲学や思想の議論が展開されるなかで、革命思想も醸成されていく。しかし、サロンでの会話は、あくまでも楽しむためのもので、何らかの方向性を持つて纏め上げられて革命運動を生み出すようなものではなかった。そうした方向性を持った者たちはサロンを出てカフェに集い、そこで出会った同志とセルクルを形成して、より閉鎖されたスペースで革命のエネルギーを蓄積していったのである。

漠然と人が集まるという性癖を持たないイギリス人の間では、サロンに相当するものはあまり発展しなかった。その代わり彼らは、特定の目的(趣味、スポーツなど)を共有する、選りすぐりの者同士で排他的な集まりを発展させてき

たのである。変化が現われるのは、十七世紀半ばのコーヒーハウスの出現によってである。イギリス最初のコーヒーハウスは、オックスフォードで開店されたが、舶来の珍しい飲み物は流行好みの都会の上流階級の間にはブームを巻き起こし、すぐに中流階級へも伝播して行く。コーヒーハウスは、金さえ出せば誰でも出入りの出来る公開の場として、多くの情報が集まる場となった。中には、そうして集まってきた情報を情報紙として発行するコーヒーハウスも登場し、またその情報を利用して事業を起こすものも出た。保険業で知られるロイズはその典型である。このコーヒーハウスは、購買力の無い庶民にまでは広がる事が無かったので、参政権を持つ高額納税者が集まり、政治情報を交換する場として利用されるようにもなった。その中から政党が生まれていったのである。⁽³⁾このことは、当時政治的発言力を持つていた者の間にどれほどコーヒーハウスが浸透していたかを物語っている。

知識人の世界は、西ヨーロッパでは長い間ローマ・カトリック教会の統制のもとにあつたが、教権の弱化やルネサンスによつて、十二世紀頃にはその影響力は翳りを見せ始め、大学、学会が各地で形成される。ポロニーヤでは、市民としての資格を持たず不利な立場に置かれていた他地域出身の学生達が出身地ごとに結束し、市当局や教師に対抗する形をつくり、これがポロニーヤ大学の原型となつていく。パリでは、教会権威の圧迫から身を守るために教師が結束する形で大学が形成されていった。

また、ラテン語文化に代わる自国語文化への関心の高まりと、ラテン語に支えられた体系的学問、スコラ学の説得力の減少のために、自国語による諸概念の再規定や新しい学問体系構築の作業が行われるようになった。宗教的概念の再規定や聖書、宗教書の翻訳(および出版)⁽⁴⁾を中心とした精神活動の中から異端的な思想が誕生し、それが宗教的セクトとして具現することもある。ワルド派、フス派、ロラード派などがその例として挙げられる。それほど宗教的ではない関心を持つアマチュア学者(専門的訓練を受けていないという意味)の集まりは、メデイチ家、ハプスブルク家のようなパトロンを得て図書館付きのサロンからアカデミーを形成したり、エリザベス一世の庇護を受けて博物学を発展さ

せたりしている。こうしたタイプの典型例が、十七世紀半ばに形成されたロイヤル・ソサエティとライプニッツらによる自然哲学協会である。

このようにして西ヨーロッパの近代社会形成へのプロセスの中で、人と人の交わりの形は多様化し、それを母胎として多様な媒介機構が誕生したのである。

これらの媒介機構には、いくつかの共通点が見られる。それらは、地域共同体、職業共同体、そしてそれらと密接に結びついている宗教共同体から解放された場で生まれている。そこに関わる者たちは、血縁、地縁、職縁に基づく社会的アイデンティティから解放された場で、「何者でもない私」として互いと出会う。互いが全体社会の中で同じような位置にあることを認識した場合、つまり互いに同類・同志として認識したときに、⁽⁵⁾彼らの間に潜在した集合心性は社会集団として顕在化するのであるが、そのような認識が得られない場合には、多くのサロンがそうであったように、緩やかな交わりのままに終わるのである。

それらは、既成秩序の中で十分な自己表現の場を得ていなかった者たちの間で発生し、進行していた社会変動を反映したり、社会変動の誘因となったりした。そのため、しばしば為政者から疑いの目を向けられ、法的規制を受けることになった。絶対君主は一般に、権力を自分のもとに集中するために媒介機構の解体を図り、個人の権利の尊重を唱える傾向を持つ。また、フランス革命政権下で発布されたル・シャブリエ法の団体的結合の禁止に見られるように、革命思想も必ずしも媒介機構に対して好意的ではなかった。⁽⁶⁾ イギリスでも、コーヒーハウスが政治的謀議の温床になることを怖れたチャールズ二世によって、一六七五年、コーヒーハウス閉鎖令が発布されている。

法的に規制されても、人が集い、同じ心を持つ人間が結合することを止めることは不可能である。非合法化された集合体は、当初どのような意図で形成されたものであっても、その存在を社会と為政者に認めさせるためには法改正を求

めざるを得ない。その結果、集団は政治的性質を帯びることになる一方で、政治活動に関心の無いメンバーを失うことになる。

要するに、旧世界での媒介機構は、既存の媒介機構と社会体制の狭間に形成され、既得権を持つ階層に対して自己の権利を守り、拡大しようとする者を集めた。その意味で、常に体制批判や体制打破の主張を秘めていたのである。

三 新世界における媒介機構

北米大陸における媒介機構は、旧世界とは全く異なる状況のもとで展開してきた。衆知の通りアメリカ大陸にも自然発生によって形成された社会が存在したが、アングロ・アメリカの社会は、既存の社会を駆逐して荒野で建設された。

イギリスの植民地開拓は、国王から特許状を得た植民会社や個人（一族）によって推進された。植民会社は、植民地から上がる利益の分配や開墾した土地の所有権、会社の運営方法などに関する取り決めのもとにジェントルマンや地主の共同出資で設立され、それぞれの開拓民とは契約関係で結ばれる。ニューイングランドで見られたように、開拓地内に新たなタウンを建設する場合には、その創設メンバーはタウンの土地取得や、土地の分配方法、タウン民資格などに關しての規約を決定した上で植民地政府の認可を得て、入植者を集める。開拓民として既存の社会に参加する場合には、自分にとってより有利な社会を選択する。そして、十分な恩恵が得られない場合には、彼らは自分自身の社会を建設するために荒野に移り住んでいたのである。つまり、イギリスの植民地社会はプリマス植民地に限らず、少なくともその出発時には契約が先行したのであり、そのメンバーは選^ちばれ^て選^ばれたのであり、そのメンバーは選^ちばれ^て選^ばれたのであり、そのメンバーは選^ちばれ^て選^ばれたのである。

独立革命において、イギリス植民地にいた者たちは、イギリス国王の臣民であり続けることと、誕生しようとしてい

る新しい国の市民になることとの間の選択を迫られた。建国後に流入した移民達も、一部の者を除けば自由意志で渡来し、合衆国に留まることや市民になることを選択して社会の一員になっている。そして、西部に広大な未開の地が存在したために、遅れて到着した者たちは、既存の社会の中で批判分子、不満分子となって異議申立ての集合心性で結ばれる代わりに、新たな社会の建設に向かつていった。

このように新世界では、社会体制そのものが契約に基づく（約縁）、選択的な性質を持ち、既存のものに対する防衛や抵抗ではなく、新たなものの創造、建設という集合心性が発生する。ここに集まった者たちは、彼ら自身が生まれ育った社会で得ていたアイデンティティから解放され、暗黙の了解を持たない見知らぬ者と社会を構築し、アイデンティティを育てようとした。彼らは、必ずしも過去を共有しているわけではないので、現在の状況や描いている未来像の類似が互いを結びつけるのである。そして、このような傾向は、より下位の媒介機構に反映されることになる。

開拓時代の統治機構は、概して住民のボランテアで運営されており、契約の履行と住民間のトラブルの調整機関としての機能を持つのみで、住民に対するサービスを期待できるようなものではなかった。そのため、住民は、治水工事、消防、外敵からの防衛といった共同体全体に関わる問題を相互の協力で克服していかなければならず、そうした協力の中心から「馬保険組合」や「火災保険組合」⁸⁾のような組織が形成される。「隣近所の助け合い」が「……組合」といった契約関係に収斂されるのは、注目に値する。

植民地開拓時代には、教会は霊的、精神的交わりであっただけではなく、共同体建設の核でもあった。この教会における交わりも、ピューリタン植民地では個人の選択（神の選びに対する応答）に基づくものであり、合衆国憲法で政教分離の原理が確立されたことよって、それがアメリカ宗教の原型となつている。教会は、存続のためにはより多くの信徒を獲得しなければならず、したがって彼らの精神的、物質的必要には敏感である。その意味で、アメリカの教会は、

一般市民と全体社会の間の媒介機構として有効に機能してきたのである。

旧世界で大きな問題となり、殺戮の原因になった宗教集団の創設がアメリカでは禁止の対象にならなかったのと同様に、政治的結社を含むその他の団体の結成も法的禁止の対象にはならなかった。一般に政治的結社は、既存の社会体制、権力構造を脅かすものとして危険視されるものであるが、合衆国の独立はそのような結束によつて勝ち取られたものである。建国父祖の中には、派閥を大衆の暴走を招くものとして嫌悪するものもあつたが、ジェファソンやマディソンは、そうした派閥や政治的結社こそ一般市民を説得する手段となり、市民のニーズがどこにあるかを知るための手段となり、少数者の主張を全体社会に伝える手段となつて、民主主義が多数派の圧政を招くことを防ぐと主張している。そして、一八〇〇年の大統領選挙におけるジェファソンの勝利は、その後のアメリカ社会の進む方向を予知するものとなつたのである。

アメリカでは、旧世界のギルドのようなものは発展しなかつた。これは、機会均等というアメリカ的感性に反するものであつたこと、西部に無尽蔵の資源が存在したために小さなパイの分け前を争う必要が無かつたことなどが影響していると思われる。アメリカで階級的利害を追求する組合が目立つようになるのは、南北戦争前後のことである。

文化の創造・育成は、旧世界では王侯貴族によつて進められてきたが、新大陸では住民自身によつて推進されることになる。十七、八世紀のアメリカには、個人で博物館や図書館を建てたり、芸術家を支援したりするほどの余裕のある者は多くなかつたが、植民地人の文化水準はそうしたものを要請した。それが、ベンジャミン・フランクリンのジャントー・クラブや、そこから発生した会員制図書館を生んだのである。

秘密結社に対しては懐疑の目がむけられ、激しい反対運動が起こることもあつた。それは、秘密結社の排他性が機会均等の原理に反するためであると考えられるが、一八二〇年代後半から一八三〇年代にかけての反メーソン、反秘密結社の嵐が去ると、数多くの秘密結社が誕生し、十九世紀後半から二十世紀初頭はアメリカの秘密結社の最盛期となつ

た。この時期、自分の平凡さに辟易していた市民は、自分と他者との差別化のために、仰々しい衣装や神秘的な儀式に憧れて、秘密結社に惹かれていったのである。各結社は機会均等と選良性を確保するために、メンバーに時間的金銭的に比較的大きなコミットメントを要求した。その結果、アメリカの秘密結社は、概して中産階級以上のプロテスタント（男性）を集めることになったのである。言い換えれば、秘密結社は、十九世紀半ばのエスタブリッシュメントに属していた者を吸収し、その文化的イデオロギーを保持、推進する役割を担ったと考えられる。

同様の機能を持ったのが、やはり十九世紀半ばに多く誕生した医師、弁護士、学者などの専門家たちの学会や連盟であろう。こちらは、その専門知識や技能によって選良性を確保し、情報交換と相互の育成を目指しているのである。

ここまで、主としてワスプの男性の集合心性と、そこから発生した集合体について概観してきた。これらは、旧世界の媒介機構の多くが発生当初そうであったような既存の体制に対する防衛や抵抗ではなく、秩序建設のためのものであった。十九世紀半ばは、アメリカの社会がワスプ中心に確立した時代であり、奴隸解放、産業革命、大量の移民の流入によって大きく変動し始める時代でもある。そうした時代の中で、主流に属さない、また属すことを許されない者たちの集合心性が明確になり、組織を形成することになる。

四 人種・という交わり¹⁰

開拓時代からワスプによって形成されてきた社会の原型は、選択的、契約的なもので、自然発生の社会の住民が抱いたような、共通の過去や文化的伝統に対する原初的な愛着が、住民の間に希薄である。彼らの間の集合心性は、今を共

有しているという事実と、未来を共有しようという意志にあらわれる。アメリカ社会のこのような特質は、未来像（合衆国憲法に象徴的に表現されている）さえ共有すればどのような人間でも受け入れ、対等な市民として処遇する可能性をアメリカ社会に持たせることになっている。

迎え入れるホスト社会の文化とは別の文化を携えてやってきた移民たちは、到来すると同時に言葉の違いや、社会制度などに熟知していないために、社会の底辺から新天地での人生を始めることになる。特にアメリカ社会の場合、時代によつて流入する移民の出身地が異なつたため、社会階級の境界と人種・民族の境界がかなりの程度重なりを見せることになつた。移民たちは、一般に渡來した時に労働力が不足していた分野に職を得たので、産業革命進展期に流入した移民たちは、鉄道・運河の建設現場や鉱工業地帯に言語や宗教、文化を共有する者同士で集まつて暮らし、エスニックな居住区を生んだ。彼ら移民一世がつくつた共同体は、まずは血縁関係と郷里に残してきたものへの原初的な愛着によつて結ばれる。彼らは母国語で礼拝を行う教会や、母国語を話す牧師・神父のいる教会に通い、そこでアメリカ社会のルールを学び、可能であれば同郷の者が経営する工場や店に職を求める。

アメリカ社会に適應するにつれて、移民やその子孫は社会階層の梯子を昇ろうとして、個人として努力すると同時に政治―社会―経済的地位を共有する者同士で結束することになる。

しかし、アメリカ社会での地位改善については、人種、民族によつてかなり異なる体験をすることになつたのである。これは、合衆国の差別的帰化法のためである。建国早々に制定された「一七九〇年帰化法」は、帰化資格として自由白人であることと合衆国管轄領域内での二年の居住を定めている。一八四八年のガダルーペ・イダルゴ条約でメキシコ系住民とインディオ住民をその領域内に抱えるようになると、合衆国は、彼らに対して市民権を付与し、さらに南北戦争後の「一八七〇年帰化法」でアフリカ系住民に帰化権が与えられた。^①先住民については、一八八七年のドーズ法が、部族を解体し、土地の個人所有を始めた先住民の市民権を認め、一九二四年には全ての先住民が市民権を得た。東洋人の

帰化については規定が無く、彼らは合衆国市民になる資格を持たなかった。合衆国生まれの二世は、一八六八年の連邦憲法修正第十四条で市民権を保障されたので、アジア系移民の子孫も市民権を付与された。しかし、一八八二年の中国人移民排斥法を皮切りにアジア太平洋地域からの移民は次々に制限、禁止され、それまでに入国していたアジア系移民の男女比率がアンバランスであったことから、日系を除くと市民権資格のあるアメリカ生まれのアジア系二世の数は極端に少なかった。第二次世界大戦の同盟関係等からアジア系への処遇は改善されたが、一九五二年の「移民・帰化・国籍法」の制定まで、帰化に関する差別は完全には取り除かれなかったのである。

帰化権、市民権の有無は、その集団の政治的効力を左右する。はじめから市民権取得資格を持ち、容貌もホスト社会の者たちと類似していたヨーロッパ系の移民は、比較的容易にアメリカ社会に同化し、ワスプの仲間入りをする。移民であることや移民の子供であることは社会的には必ずしも有利に働かないので、一世、二世は可能な限りワスプを模倣し、彼らの中に溶け込もうとしたのである。しかし、三世以降の世代は主流文化に所属する他の者から自分を差別化するために、自分のエスニシティに注目する。彼らにとつてのエスニシティは、親や祖父母から継承し、子供の頃から慣れ親しんで愛着を持っているようなものではなく、いくつかの選択肢の中から選り取られるものである。このことは、民族間結婚の結果複数のエスニシティを持つことになった者に端的に表れるが、そうでない者にとつても、「アメリカ人」であることと「……系アメリカ人」であることとの間の選択は存在するのである。アメリカ社会の中で十分な権利と機会を得ている彼らにとつて、エスニシティに基づく交わりは、利害を追求するためのものであるよりも文化的なものである。彼らはエスニックな伝統に基づく祝祭日を祝い、祭りに出かけ、エスニック料理を堪能する。そして、自分のエスニシティを題材とする映画やテレビ番組の視聴者となる。しかし、彼らは、それらのものが彼らの祖先の故国で行われているものをどれほど正確に反映しているかといったことには関心を持たない。また、彼らは、コミットメントを要求されるような組織への参加を好まない。つまり、ヨーロッパ系の移民とその子孫たちのエスニシティは、組織の形

をとらない半意識的集合体として、全体社会と個人を媒介しているのである。¹³⁾

一方、帰化権、市民権を与えられなかった者たちは、まずはそうした権利を獲得するために闘わなければならなかった。この闘争は、黒人たちによって先鞭をつけられ、公民権運動からブラック・パワーへと運動が変化していく過程で、彼らの要求が政治的権利から実質的な社会的平等にまで高まると、主流社会の中で同じような立場にあった先住民、アジア系、ヒスパニック系も各々の主張と方法で闘争を展開した。

しかし、「黒人」、「先住民」、「アジア系」、「ヒスパニック系」という個々の分類の中には多様な下位グループが含まれ、その各々の下位グループは、集団としてのアイデンティティを持つに足る伝統や文化を共有していないことが多いのである。彼らに互いを同類であると認識させ、結束させたのは、アメリカの主流を成している白人社会が彼らを一つの集団とみなし、差別し、社会が与える恩恵から彼らを排除しているという事実（または信念）であり、共闘することがより大きな成果をもたらすという期待である。つまり、彼らにとつての「エスニック」な結合は利害関心に基づくもので、約縁的な性質のものなのである。彼らは、原初的な愛着の対象である彼ら自身が規定するエスニシティの境界を越えて、力のある部外者（主流社会）から一方的に押し付けられた枠組みで結束して闘うことを余儀なくされ、またそうすることを選んだのである。

このように、合衆国における人種・民族の交わりには大別して二つのタイプがある。一方は過重なコミットメントを要求しない象徴的、文化的エスニシティであり、他方は権利と機会を拡大する手段としてのエスニシティである。この双方に共通するのは、人種・民族という一般には自然発生的、情緒的な性質の集合心性で結ばれる交わりが、自発的、約縁的性質を持つことである。

五 結 び

本稿では、自然発生的に成立した社会における媒介機構の変遷を概観しながら、荒野にある意図を持つて建設されたアメリカ社会における媒介機構の特徴を浮き彫りにしようとしてきた。

旧世界では、血縁、地縁、家父長的な職縁関係から解放されたところで、そうした既存の体制に対抗する形で約縁的な集合心性が発生した。そして、その集合心性が組織の形を取る場合には、合理的、手段的なものになる傾向がある。

他方、新世界の社会は約縁に基づいて建設され、合衆国憲法の形で提示された国家と市民との間の契約に同意した者を受け入れてきた。社会体制が流動的である時期に発生した媒介機構は、対抗的、防衛的であるよりは、価値創造的、建設的な傾向を持つ。社会体制が確立した後には渡来した移民たちや、秩序形成の過程で国家が提供する恩恵から除外された者たちは、憲法に約束された権利と機会を得るために結束したが、排除が人種、民族、性に基づくものであったために、十九世紀半ば以降に成立する媒介機構は、人種、民族、性の集合心性の中から生まれた。しかし、合衆国での「人種」、「民族」は、生物学的要因のみによって定義されるものではなく、社会的要因に規定された定義であり、人々の中に自動的に忠誠心を引き出すようなものではない。したがって、その結束は、社会の中で同じ位置に置かれた者たちの結束という階級の意味合いが強い。このことは、ワスプと同列の地位を得たヨーロッパ系エスニックが自由にアイデンティティを選択し、変更することや、内部に多様な下位グループを抱えながら主流社会での位置を同じくするために結束している「黒人」、「先住民」、「アジア系」、「ヒスパニック」の例を見れば明らかである。

大量生産とコミュニケーション技術の発達により画一化が進む今日の社会の中で、人は「類」とどのようにして出会

うのか、人種・民族がその一つの集合心性であることは否めないが、コーエンは、エスニックな交わりのなかで第三世代、第四世代が優勢になったときにその特異性を保持できるか否かは、その交わりの利益集団としての機能と効用に左右されると推察している。一方、ダニエル・ベルは、エスニック集団がメンバーに全人格的なアイデンティティを提供し、彼らを情緒的につなぐものでもあるために、それらが利益集団として機能し続けるならば、現代社会において非常に有効な媒介機構となると論じている。

合衆国は、共通の未来像を描くことによつて、身体的特徴も歴史や起源も、そこから派生する文化や価値、言語も共有しない者たちの間に一つの集団としてのアイデンティティを生じさせてきた。未来へ向かつての媒介機構の構築というアメリカのパターンは、過去からの桎梏を克服して新しい共同社会を形成するという人類の課題に一つのヒントを与えているのではないだろうか。

注

- (1) ハンザ同盟やフランスの自由都市連合などは、こうした目的を持つものである。
- (2) フランス巡歴 (Tour de France) など。
- (3) イギリスのコーヒーハウスは一六八〇年代に最盛期を迎えるが、一七二〇年代には開店ブームに翳りが見え始める。これは、イギリスがオランダとのコーヒー供給競争に敗北したことと、茶関税の引き下げによつて紅茶が普及したことが大きく影響している。紅茶は小売りもされたので、特に上流、中流階級の間では、紅茶を家庭で楽しむ習慣が定着していくこ

とになった。

(4) グーテンベルグの活版印刷の発明がこれを技術の面で支えたのである。

(5) 人が互いを同類・同志と認識するのは、身体的特徴(遺伝子の共有)、名称、起源や歴史とそこから派生する言語、宗教、価値体系、生活様式、現在の政治―社会―経済的地位などを共有する場合、または共有していると信じている場合である。自然発生的社会の中で互いを同類と認識した者たちが集団を形成するのは、その時点での政治―社会―経済的地位が同じ、または類似している(と信じている)場合である。Harold R. Isaacs, "Basic Group Identity: The Idols of the Tribe," in

Ethnicity (1975), pp. 32-33.

(6) フランスにおける社団結成の禁止および制限は、対象と程度を変えながら一九〇一年まで存続した。

(7) メイフラワー盟約は、プリマスが植民会社の管轄外であったために、植民会社と開拓民の間の契約は無効であるという一部の者の主張に対して、秩序を維持することを意図したものである。

(8) これらの組織は、日常生活に不可欠な交通手段であり、動力であった馬の盗難や、家屋その他の財産の焼失からお互いを守るために、馬泥棒の捕縛や消火活動を組合員全員で行い、不幸にして被害を防ぐことが出来なかった場合には、相応の保険料が組合から支給されるというものである。

(9) 一八二六年、ニューヨーク州バタヴィアで起こったウィリアム・モルガン殺害事件をきっかけとする。モルガンは、フリーメーソンの会員であったが、組織の反対を押しきって『メーソンの凶解』という書物を出版し、その直後に行方不明となつて水死体で発見された。モルガン失踪の翌日、本を印刷した店も焼失している。

(10) 黒人は人種と捉えるべきか、アフリカ系という民族と捉えるべきか、「アジア系」は人種集団か民族集団か、を考へるとき、その境界はあいまいである。ここでは、民族―人種集団(ethnic racial group)という概念を提唱したホリンガーにならつて、人種と民族を特に区別しない。

(11) 黒人に対する参政権の制限が実質的に、完全に撤廃されるのは、一九六五年の投票権法によつてである。

(12) 白人でもカトリック移民は合衆国では懐疑の目で見られていたため、アイルランド系住民は、郷里での地下活動の経験から得た組織活動のノウハウを用いて、他のカトリック移民を政治活動や労働運動に動員し、アメリカ社会での地位を確保しようとした。

(13) このようなエスニシティをハーバート・J・ガンスは「象徴的エスニシティ」と呼び、組織の基盤を持たないので衰退・消滅する運命にあると予測している。 Cf. Gans, 1979.

主要参考文献

- Carnes, Mark C., *Secret Ritual and Manhood in Victorian America* (London: Yale University Press, 1989)
- Cohen, Abner ed., *Urban Ethnicity in the Americas* (London, New York: Tavistock Publications, 1974)
- Gans, Herbert J., "Symbolic Ethnicity: The Future of Ethnic Groups and Cultures in America," in *Ethnic and Racial Studies* 2 (January, 1979), pp.1-20
- Glazer, Nathan and Daniel P. Moynihan eds., *Ethnicity — Theory and Experience* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1975)
- Hollinger, David A., *Postethnic America — Beyond Multiculturalism* (New York: Basic Books, 1995)
- Tocqueville, Alexis de, *Democracy in America* (translated by Henry Levee, London, 1839)
- Waters, Mary C., *Ethnic Options — Choosing Identities in America* (Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1990)
- 大西直樹『ブルグリン・ファーザーズという神話』講談社、一九九八年
- 小林章夫他『クラブとサロン——なぜ人びとは集うのか』、N T T出版、一九九二年
- 沢田善太郎『組織の社会学——官僚制・アソシエーション・合議制』、ミネルヴァ書房、一九九七年
- 柴田三千雄『社会的結合』シリーズ世界史への問い4、岩波書店、一九八九年